

「ワタシ」から「ボク」へ

～自分に正直に生きていきたい～

まさひろ
競艇選手 安藤大将さん

「性同一性障害」って知っていますか？

2004年7月16日「性同一性障害者の性別の取り扱いの特例に関する法律」(用語解説参照)が施行されます。これにより性同一性障害である人は戸籍の性を変更できるようになります。

性同一性障害とは、生まれながらの自分の性別(からだの性)と心理的な性別(こころの性)が一致しないため、その食い違いに悩み、社会生活などに支障をきたす状態をいいます。

性同一性障害については、テレビドラマで紹介されたりマスコミに取り上げられたりもしていますが、まだまだ、社会の認知度は低い状況です。



安藤 大将 (あんどう まさひろ) さん
1984年、競艇選手の54期生として登録。2002年3月、「性同一性障害」のため、今後は男子選手として登録すると発表。

そうぞう

2

2004.6*No.9

今回は「性同一性障害」であることを公表し、現在、競艇選手として活躍されている安藤大将さんにご自身のことや周りの方々とのかかわりなどについてお聴きしました。

当事者の声が法制化の大きな要素に

「性同一性障害特例法」ができて、すごくうれしい。今まであまり表に出ることのなかった当事者が声をあげ、訴えてきたことが大きな要素になったと思います。また、ボク自身にとっても色んな意味でタイミングがよかった。

2年前に「性同一性障害」であるということをマスコミの前でカミングアウト(用語解説参照)して、生まれてからずっと使ってきた「安藤千夏」という名前を「安藤大将」と改名して男子選手として登録することを公表したときも、多くの方が関心をもち応援してくれました。そして法制化。さまざまなことが一度に動き出し、後押しされた感じです。

幼いころからの違和感— 両親の思い・そして自分との葛藤—

ボクは、小さいときから自分の性別に対してすごく違和感がありました。見た目は女の子ですから、両親はどうしても女の子として育てたいわけです。でも、ボクはその枠に入りきれない、この場所は「居心地が

悪い、違うな」ということを常に感じていました。

兄弟と遊んでいても女の子のおもちゃに興味がない。男の子のおもちゃが好きだったり、外へ出て木に登ったり…。いわゆる“女の子らしくない”ということで、両親はかなり心配していました。

大きくなるにつれて、トイレの問題とか着る物とかますます違和感が増えてきました。それなのに、両親は一向に“女の子らしく”ならないボクを見て悩み、ことさらに女の子らしい外見や行動をさせたりしました。

両親の気持ちも痛いほどわかるし、悲しい顔も見たくない。でも、女の子として生きていく違和感はなくならない。身の置き所をどこにもっていったらいいのか、幼いころからずっと自分との葛藤が続いていました。

競艇との出会い マイ・ベストジョブ

高校卒業後、進路について思い悩んでいました。そんな時、何気なく買った雑誌の「競艇選手募集」という記事にすごく心を惹かれました。競艇のことは全く知りませんでしたが、「あ!これだ」とピンときて、女性としての平凡な幸せを望む両親の反対を押し切って、この世界に飛び込みました。

実際、競艇は男女が対等で勝負を競い合い、しかも報酬は実力次第、唯一あるのは体重制限という男女差の少ない競技なのです。実力主義のこの仕事

は、夢中になれる時間がたくさんあって、自分の心と体がバラバラなことを少しの間、忘れさせてくれるかけがえのないものでした。

しかし、30歳すぎたころから、体と心の違和感は、ますます深刻なものになっていきました。「女性として生きていくしかないのなら、もっと、女らしくしなくてはいけない」と考える自分と、「そのために化粧をしたり、ブランド物の服を着ることがゆるせない」という自分がいました。二つの気持ちの間で、悶々とした日々を送るようになり、その気持ちを抑えるためにさらにモーターボートに打ち込みました。

心に光が 正直に自分らしく生きたい

そんな時、ふらっと出かけた本屋で一冊の本と出会いました。吉永みち子さんの「性同一性障害－性転換の朝－」という本。ボクはそのタイトルを目にするのも初めてなら、それに対する知識もまったく持ち合わせていなかったのですが、不思議なことにその本だけが、たくさんある本のなかから、ボクの目の前に突然現れたような奇妙な体験でした。

家に帰って一気に読み、ものすごくショックを受けました。「病院で病気として認められている。公的に治療が受けられる」ということが書かれているのを見たとき「光が差した」ような気がして、胸のドキドキがしばらく止まりませんでした。

それまで、テレビや雑誌で性転換した人を見てボクは、絶対に進んではいけない道だと思い込んでいました。しかし、「公的に認められているのであれば両親も認めてくれるかもしれない…」。かすかな望みが出てきたような気がしました。

ただ、病院に行くまでには、ものすごい葛藤がありました。30数年も黙ってきたわけですから…。でも、「正直に、自分らしく生きたい」という長年押さえつけてきた思いがあふれ出し、もう止まりません。“本当の自分”に突き動かされたボクは、3ヵ月後、病院の診察室の前にいました。

多くの人の支えで、今は幸せに

病院のカウンセリングに通いながら、同じ病気をもつ仲間に出会いました。病院の先生や仲間を得たことで、ボクの気持ちは、自然に前だけを向くようになり、どんな高い壁、ハードルも越えることができるような気がしました。

そして、親から授かった大切な体にメスを入れ、肉体の性別を変えることを両親に打ち明けました。ふたりの衝撃は大きく、母は泣き叫び、父は思いとどまるよう必死に説得にかかりました。実際、両

親とボクの間での考え方の差を縮めるまでには、重苦しい日々が続きました。今では、母は「お前が幸せならばそれでいい」と言ってくれていますが、まだ戸惑っていると思います。

同時に、競艇関係者にも事実を打ち明け、男子選手として競技を続けたいと訴えました。ボクは女性から男性になっても、20年近くの心の支えであった仕事をやめることは考えられませんでした。

前例のないはじめてのケースでしたが、先輩や周りの方々の奔走のおかげで男子選手として再デビューすることができました。

振り返れば、短い間に色々なことがありましたが、今、ボク自身は、とても幸せです。

手術後も競艇選手として登録することを認めてくれた全国モーターボート競争会連合会の役員、選手会のみなさん、また、診察・治療していただいた先生方、同じ病気を持った仲間、そして、最終的にはボクの気持ちを受け止めてくれた両親、多くの方々の支えがあつてのおかげです。

カミングアウトしてからプラス面もありましたが、もちろんマイナス面もありました。批判、好奇の視線、身に覚えのない中傷などです。

でも、自分に正直になるほど強いことはないと思う。だから、同じ病気で悩んでいる人たちには、他人のためでなく自分のために生きてほしい。

そして、これからは、「男」、「女」ではなく、みんな仲良く、人間として認められる社会になってほしいと切実に願っています。そのことで、悩みを抱えている人たちの支えになることができればと考えています。



水上の安藤選手

取材を終えて

長い間自分ひとりで悩み続けた安藤選手、自分に正直になることで、多くの理解者や応援者を得、「ひとりの人間として」前向きに生きていこうとするその姿にさわやかな風を感じました。